

# 高等教育機関における パブリックスピーキング教育

—「聞くこと」を含めた体系的な学びに関する考察—

Education of Public Speaking in Higher Education Institutions:  
A Study on Systematic Learning including Practices of Listening

KASHIMA, Chiho

鹿 島 千 穂

日本語コミュニケーション学科専任講師

## 抄録：

「話す力」の向上を目指す教育は小中学校から行われ、プレゼンテーションやスピーチ等、公の場での「話す力」を高めるさまざまな取り組みが教育現場で実践されている。本稿はわが国におけるパブリックスピーキング教育の現状を踏まえつつ、日本語コミュニケーション学科の必修科目「ビジネストーク演習」の事例を提示し、高等教育機関におけるパブリックスピーキング教育について考察するものである。パブリックスピーキング教育は「話すこと」と同様に「聞くこと」を強化し、体系的に学びを深めていくことが重要であると指摘する。

## Abstract：

Education focused on the improvement of speaking ability, such as presentation skills and formal speech, has been a part of compulsory education. In this study, we overview the current education of public speaking and analyze how it should be conducted by providing examples of Communication for Business Practices classes at the Japanese Communication department. The results indicate the importance of encouraging listening as well as speaking and utilizing the systematic learning plan.

**キーワード：**パブリックスピーキング、プレゼンテーション、スピーチ、「話す力」、TED

**Keywords：**Public speaking, Presentation, Speech, Speaking ability, TED Talk

## 1. はじめに

実践女子大学短期大学部日本語コミュニケーション学科は日本語四技能（「読む」「書く」「話す」「聞く」）の向上に力を入れている。筆者はこのうちの「話す」「聞く」に関する授業を主に担当している<sup>1</sup>。学生は短期大学入学前に「話すこと」に関する指導を小中学校および高校の国語の授業で受けている。一方、巷では効果的なスピーチの方法を指南する、いわゆるノウハウ本が時にベストセラーとなることもあり、「話す力」を軸としたコミュニケーション能力獲得への社会的関心度は高い。

では、社会へ出るための準備期間とも位置づけられる短期大学において、学生の「話す力」向上のための授業はどのように展開するのが適切だろうか。本稿はわが国におけるパブリックスピーキング教育の現状を踏まえつつ、日本語コミュニケーション学科の1年生を対象とした必修科目である「ビジネストーク演習」<sup>2</sup>の事例を提示し、「話す力」を向上させるためのパブリックスピーキング教育について考察するものである。

## 2. パブリックスピーキングに関する学び

### 2-1. パブリックスピーキングの定義

深澤・ヒルマン小林はパブリックスピーキングを「ある程度改まった場所で、一人の話し手が対象となる複数の聴衆に、自分の責任において自分の考えを理論的にまとめて伝えようとすること」（深澤・ヒルマン小林 2012：26）と定義している。河野はこの定義を補う条件として「一定の時間」をあげる（河野 2014：95）。元NHKアナウンサーで、大学で教鞭をとる高橋によれば、パブリックスピーキングは日常のおしゃべりとは異なり「①少し改まった場で、②限られた時間のなかで、③1つのテーマにしばって、④整理された内容を、⑤聴き手に正しく伝わるように、話すこと」である（高橋 2003：39）。アメリカでパブリックスピーキングの教科書として支持されている『The Art of Public Speaking』の著者ルーカスは、パブリックスピーキングを「考えを公にし、他者と共有し、影響を与える方法」<sup>3</sup>としている（Lucas 2015：4）。以上のことから、パブリックスピーキングとは「公の場で、決められた時間内に、聴衆に向けて自分の考えを伝え、それにより聴衆に影響を与える行為」と定義し、論を進めることとする。

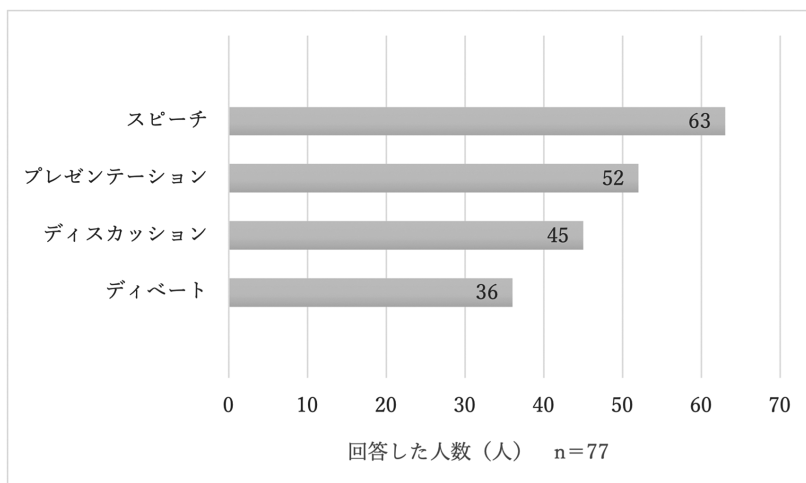
それでは、具体的にどのようなコミュニケーション形態をパブリックスピーキングと呼ぶのだろうか。真っ先に思い浮かぶのはプレゼンテーションやスピーチだろう。これらのコミュニケーションは基本的に一人の話し手が聴衆に向かって話すスタイルであるが、上記の定義に照らせば、話し合いの場としてのディスカッションやディベートもまたパブリックスピーキングに含まれる。さらに、入学試験や就職活動の面接もパブリックスピーキングの一種といえるだろう。このように、パブリックスピーキングの範囲は広く、さまざまなコミュニケーション形態がパブリックスピーキングに相当するのである<sup>4</sup>。

## 2-2. 「話すこと」「話し方」に関する高校までの学び

ところで、短期大学の学生たちは高校卒業までにどの程度パブリックスピーキングを経験しているのだろうか。図1は、「ビジネストーク演習」の初回授業で「人前で話す機会として、過去にどのようなものを経験したことがあるか」についてアンケートをとったものである。スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートの4つのコミュニケーション形態のうち、経験したことがあるものを選んで回答させた（複数回答可）。

その結果、もっとも多かったのはスピーチの63人で、全学生77人中の8割超が短期大学入学前に経験があった。次いで、プレゼンテーションが52人（68%）、ディスカッションが45人（58%）、ディベートはもっとも少なく36人（47%）であった。このように何らかのパブリックスピーキングを経験していた学生が大半を占めた。

図1 経験したことがあるパブリックスピーキング



さらに、「話すこと」や「話し方」について、小・中・高校の国語の授業等で学んだ内容を聞いたところ、学びの程度によりおおむね以下に示す4つのグループに分かれる傾向にあった。

### 高校で「国語表現」を履修

もっとも詳しく学んだ経験があったグループは、高校在学中に選択授業として「国語表現」を履修した3名で、以下のような内容をすでに学んでいた。

- ◇ 話し言葉のことや発表の仕方、朗読や早口言葉をやって発声を練習したこともあった。発表したことも多く、原稿の構成などについても学んだ。
- ◇ 話す時の抑揚や目線、声の大きさを指導してもらい、自分が周りの人にすすめたい本を取り上げ、プレゼンテーションした。
- ◇ スピーチや他己紹介をやった。伝わりやすい原稿の作り方も学んだ。

#### 小中高の国語の授業等で触れた

このグループは、小中学校および高校の国語の授業等で「話すこと」や「話し方」について何らか学んだことがある学生で、層は厚かったが学びのレベルはさまざまだった。

- ◇ 声の大きさ、ジェスチャー、強弱などを小学生で学んだ。
- ◇ 小学生の時、「聞き手に伝わりやすい話し方」をテーマにミニスピーチをやった。
- ◇ 小学校や中学校の国語の授業で、話し言葉や敬語について触れる程度で学んだ。
- ◇ 中学生の国語の時間に相手を思いやる話し方について学んだ。
- ◇ 高校の国語の授業で学んだ小説の感想を、時間を決めて話した。
- ◇ 高校の国語の授業で、毎回物語を音読した。大きな声ではきはき読むことを教わった。

#### 授業以外で指導を受けた

授業以外の課外活動や入学試験の面接準備のために「話すこと」や「話し方」の指導を受けたことがある学生も複数いた。

- ◇ 大学入試の面接の練習の時に軽く教わった。
- ◇ 面接の準備のため、敬語の使い方や礼儀について高校の先生から教えてもらった。
- ◇ 中学時代、市の英語スピーチ大会に向けての対策や生徒会選挙の応援演説の際に相手にむけてどのように自分の考えを述べるべきかを教えてもらった。

なお、「小中高の国語の授業等で触れた」と「授業以外で指導を受けた」のグループは、回答内容から明確に線引きできず、「授業等での学び」と「授業外での指導」の両方を経験している学生も数名いた。

#### 学んでいない

「話すこと」や「話し方」について学んだことがないと回答した学生は17人であった。

- ◇ 特に話すことや話し方について、学んだり教わったりしていない。
- ◇ 高校3年生の授業であった現代文研究で「聞く」「書く」はやったが、「話すこと」や「話し方」については触れられなかった。
- ◇ 授業などでしっかりと教わった記憶はない。

現短期大学部1年生は、2008年に改訂された学習指導要領のもと、小中学校の「国語」の授業で「話すこと」の指導を受けている。学習指導要領には、小学校第1学年及び第2学年の「話すこと」「聞くこと」の中に、「姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して、はっきりした発

音で話すこと」が目標として明示されている。第3学年及び第4学年では、「相手を見たり、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意したりして話すこと」とある。また、中学校の国語の教科書では、全ての出版社が第1学年でスピーチ、第2学年でプレゼンテーションを取り扱い、第3学年で「条件スピーチ」「パブリックスピーキング」等の単元を設けている<sup>5</sup>。

このように、義務教育課程でパブリックスピーキングに関する学びが設定されているにもかかわらず、「教わっていない」と回答する学生が一定数見られることは何を意味するのだろうか。日本ではスピーチやプレゼンテーション、ディスカッション、ディベートといったパブリックスピーキングは教育現場において実践されてはいるものの、パブリックスピーキングの根幹をなす「話すこと」や「話し方」についての学びの経験には個人差があると考えられる。背景には、授業時間確保の難しさや「話すこと」に関する授業の質の担保が各教員の裁量に委ねられている現状があることが浮き上がり上がってくる<sup>6</sup>。

### 3. 先行研究

パブリックスピーキングに関する先行研究は、英語教育における外国語の口頭コミュニケーション教育研究として理念や指導方法を論ずる内容が多い。日本語のパブリックスピーキングでは、深澤・ヒルマン小林による留学生を対象とした日本語教育に関するもの（2011, 2012）や深澤（2017）の研究があるが、日本語母語話者を対象とした日本語のパブリックスピーキング教育に関する研究はさほど多くはない。

それゆえ先行研究は限定されるものの、米田・山田は、日本の中学校の国語教科書におけるパブリックスピーキングの単元とアメリカのパブリックスピーキングの教科書を比較している。それによれば、日本の教科書におけるパブリックスピーキングは「聞くこと」の意識が薄いという。アメリカは「批判的思考力」を育てるために「聞くこと」の視点を取り入れているのに対し、日本は話し手の立場からの言及のみで、「聞くこと」の視点を含めていないと指摘する（米田・山田 2015：12-13）。

パブリックスピーキングで求められる「聞くこと」とはどのような能力だろうか。例えば、伊藤は「聞く」という行為は単に受動的な行為ではなく、コミュニケーションの目的によって聞き方を切り替える必要があると述べる。伊藤は「聞くこと」に関する研究の第一人者であるウォルビンとコークスによる5つの聞き方タイプを示し<sup>7</sup>、このうちの「批判的聞き方」を重視する。「批判的聞き方」とはメッセージの内容を評価・判断することを目的にした聞き方で、できるだけ冷静かつ公平・中立的に、知識・理解力・メタ認知力を駆使して吟味・検討することが求められるものである（伊藤 2008：179-182）。

パブリックスピーキングの場面で求められる聞き方とは、まさにこのような「批判的聞き方」であろう。高等教育機関にふさわしいパブリックスピーキング教育は「聞くこと」の視点を強化し、「話し方」とともに「批判的聞き方」を身につけさせることが不可欠である。

さらに、「話すこと」や「話し方」の知識は断片的ではなく、緻密な計画のもと体系的に学ぶ

べきである。次章ではこのような点を意識した「ビジネストーク演習」の事例を提示し、パブリックスピーキング教育の可能性を探る。

#### 4. パブリックスピーキング教育の例ー「ビジネストーク演習」

本章では、高等教育機関におけるパブリックスピーキング教育の一例として、短期大学部日本語コミュニケーション学科の必修科目「ビジネストーク演習」における学びをみていく。本授業は「話すこと」「聞くこと」に関するさまざまな学びを体系的に実践することを意識している。具体的には学びのサイクルを5つのステップに分け、これらを繰り返すことで学生が成長を感じ、段階的かつ体系的に学びを深められるよう工夫している。

##### 4-1. コミュニケーションの理論・スキル (インプット)

第1ステップは「話すこと」に関するインプットを行う。まずは話し言葉の特性や非言語コミュニケーションの重要性をいくつかの理論を通して理解するとともに、表現技術の基礎を学ぶ。例えば、安定したよい声を出すための腹式呼吸の仕方、姿勢の整え方、発声・滑舌練習を行い、「はっきり、ゆっくり、大きな声で話す」といった漠然とした指導ではなく、話の内容や感情を伝えるために重要な5つの要素として「イントネーション (抑揚)」「アクセント (高さ・強さ)」「プロミネンス (卓立)」「スピード (速さ)」「ポーズ (間)」を意識し、場や内容により緩急をつけることでメッセージが伝わりやすくなることを指導する。天気予報や短いニュース原稿を用いて練習し、音声表現に対する意識を高める。

##### 4-2. パブリックスピーキングの準備

第2ステップではパブリックスピーキングをするための準備に取り掛かる。パブリックスピーキングは「公の場で」「聴衆に向けて」語る行為であることから、聞き手の存在を十分に認識させるために、まずは聴衆分析を行う。その上で、伝わりやすい構成の仕方と原稿の作成方法を指導し、テーマに沿った発表内容を準備させる。原稿作成後は各自がパブリックスピーキングの実践に向けて、音声表現のポイントと発表時間の厳守を念頭に自宅等で練習を重ねる。

##### 4-3. 実践の場 (アウトプット)

第3ステップではパブリックスピーキングの実践を行う。一般に、学んだ知識はインプットと同様にアウトプットすることで自分のものとなり学びが深まることは知られているが、「話すこと」に関しては殊の外アウトプットの場が重要である。「ビジネストーク演習」では、全14回の授業で3回の実践の場を設けている。パブリックスピーキングの形態は3回ともスピーチとし、1人当たりの発表の持ち時間は、テーマにより1分間もしくは2分間とした。

#### 4-4. 他者のパブリックスピーキングを「聞く」

第4ステップは他者のパブリックスピーキングを「聞くこと」に注力する。他の受講生のスピーチ中、発表者以外の学生はアクティブリスニングでパブリックスピーキングを聞くよう指導する。アクティブリスニングのポイントは、「相手の目を見て話を聞く」「うなずきや表情で受け止めたことを示す」「メモをとる」の3点で、発表者だけでなく聞き手もパブリックスピーキングの参加者であることを意識させる。

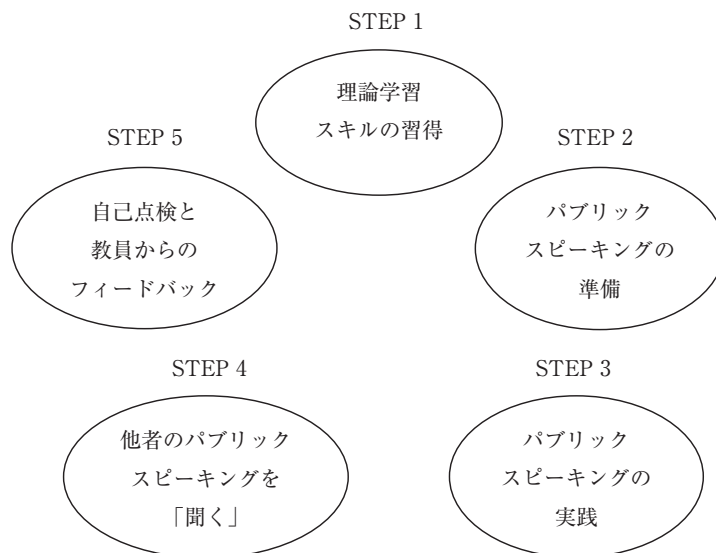
これに加え、学期の最終回には3回目のパブリックスピーキングのテーマに関連した動画を視聴する。2021年度は期末パブリックスピーキングのテーマであったSDGsに関連する動画を視聴し、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションの双方からパブリックスピーキングの分析を行った。内容は次章で詳述する。

#### 4-5. 自己点検と教員からのフィードバック

第5ステップではパブリックスピーキングの自己点検を行う。第3ステップの実践の際、発表者は録音機器を用いて自身の音声を録音している。発表後はmanabaを通して教員から個別にパブリックスピーキングの評価とフィードバックコメント<sup>8</sup>が送られるが、学生は録音の音声を聞きながらフィードバックコメントを確認し、事後学修に努める。学生はメタ認知力を働かせてパブリックスピーキングの自己点検を行い、次回の実践に向けて新たな目標を立てる。

以上の5つのステップを可視化したものが図2である。「インプット→アウトプット→フィードバック」のサイクルを繰り返すことで、螺旋階段をのぼるように成長していくことができる。

図2 「ビジネストーク演習」における学びの5つのステップ





## 5. 「聞くこと」の強化

パブリックスピーキングが「公の場で、決められた時間内に、聴衆に向けて自分の考えを伝え、それにより聴衆に影響を与える行為」である以上、それは公共性をもつものである。齋藤は公共的空間へアクセスする「言説の資源」として、「どのような語彙をもっているか」「言葉をどのように語ることができるか（書き方・語り方）」「公共の場に相応しいテーマ」の3つが重要であると述べる（齋藤 2000：11-12）。「公共の場に相応しいテーマ」について語るためには、自らを取り巻く社会へと目を向け、自分と社会の繋がりを強く意識する必要がある。そこで、本授業では段階的に「話す力」を伸ばしつつ、学期末に行う3回目のパブリックスピーキングで社会問題を取り扱う。本章では、パブリックスピーキングの要ともいえる「公共の場に相応しいテーマ」への気づきを得るために行った「聞くこと」の実践である動画視聴について詳述する。

### 5-1. パブリックスピーキングの教材としてのTED トーク

TED は Technology（テクノロジー）、Entertainment（エンターテインメント）、Design（デザイン）の頭文字をとったプレゼンテーションのイベントである。この3つの分野からスピーカーを集め、“Ideas Worth Spreading（価値あるアイデアを広めよう）”というコンセプトのもとアメリカ・カリフォルニア州で始まった。その後、TEDx（テデックス）という形で、TED からライセンスを受けた自治体や大学によるプレゼンテーションイベントが世界中で開催されるようになった。現在のTED やTEDx で語られる分野は、ビジネス、科学、医療、教育など多岐に渡り、プレゼンテーションは多言語で行われ、ウェブサイト上で配信されたものが無料で視聴できる。

TED トークには良質なプレゼンテーションが多く、学生がパブリックスピーキングを学ぶ際の教材としても有用である（鹿島 2016：29-32）。登壇するスピーカーは、台本を手にはせず、自身の専門分野、社会問題の解決方法、人生で学んだ知恵等、価値あるアイデアを大勢の観客に向けて発信する。取り上げられるテーマは公共の場で語られるにふさわしいものである。また、話すスピード、間の取り方、ジェスチャー、表情等の非言語コミュニケーションが秀逸で、パブリックスピーキングの手本として視聴するのに適切な教材といえるだろう。

しかしながら、短期大学に入学したばかりの日本語コミュニケーション学科の1年生のうち、「TEDを知っている」あるいは「過去に視聴したことがある」という学生は全体の1割に満たない。しかも、視聴経験のある学生は英語学習を目的とした場合が多く、パブリックスピーキング力向上のために視聴した学生は皆無である。そこで、まずはTEDの概要を解説し、「批判的聞き方」のポイントを指導した上で視聴を試みた。

### 5-2. TED トーク視聴の事例－御手洗瑞子 KESENUMA SWEATERS

一般的に評価の高いパブリックスピーキングとして、バラク・オバマ元大統領の演説やステイブ・ジョブズ氏のスピーチが知られている。彼らのパブリックスピーキングは多くの研究者やコミュニケーションに携わる人々に分析され、現代のパブリックスピーキングのロールモデ



ルとも称されるが、短期大学の学生に手本として視聴させるものであれば、日本語で実施されているものの方が、理解度や親近感の観点から効果が高いと考えられる。そこで膨大な数の TED トークの中から、このような条件を満たし、なおかつ学生の興味関心を惹くテーマが語られている 1 本を選んだ。それが、実業家である御手洗瑞子の「KESENNUA SWEATERS」である。

選定理由は「①日本人のスピーカーで、日本語で話していること」「②女性で、学生と年齢が比較的近いこと」「③期末のパブリックスピーキングで取り扱った SDGs に関連した内容であること」の 3 つである。「KESENNUA SWEATERS」は、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた宮城県気仙沼市の女性たちに、漁網を編む技術を基盤にしてセーターを編むという新たな仕事を創出し、地域が活気を取り戻していくという内容だ。

TED トークの視聴中は、何が語られていて、それは SDGs のどの目標に繋がっているのかを考えること、そしてスピーカーの非言語コミュニケーションで気づいた点を全てメモするよう指示した。学生たちは 10 分程の TED トークを「批判的聞き方」で視聴し、書き出した内容をもとに視聴後はクラス全体でディスカッションした。

その結果、新たな雇用の創出は SDGs の 17 の目標のうちの 8 番目「働きがいも経済成長も」に、地域の復興は 11 番目の「住み続けられるまちづくりを」に、そして高い技術で編まれた丈夫なセーターを末永く愛用することは 12 番目の「つくる責任つかう責任」へと繋がることを学生自らが見つけ出し、学期の集大成となるべく活発な議論が交わされた。また、「批判的聞き方」により、話すスピード、間の取り方、ジェスチャー、表情等の非言語コミュニケーションがパブリックスピーキングにいかなる効果をもたらしているのかを分析し、「話し方」や「話すこと」に関する学びを深めた。

以上の取り組みは、学生の目を社会的関心事へと向けさせ、公共的空間での語りを意識させるために、「聞くこと」の実践を効果的なタイミングで導入する手法が有効であることを示唆している。「話すこと」や「話し方」について技術的側面から指導した上で、次のステップとして「聞くこと」に注力して客観性や批判性を養うことが、「話すこと」のスキルアップへと繋がっていくのである。

## 6. パブリックスピーキング教育のこれから

学習指導要領のもと、国語の教科書には小学校から「話すこと」「聞くこと」の目標が設定され、学生たちは短期大学入学前にパブリックスピーキングの場を経験している。しかしながら、短期大学入学時には学生の多くがパブリックスピーキングの根幹をなす「話すこと」や「話し方」の教育を十分に受けてはいない。また、「話すこと」や「話し方」に関する能力は、個人が生まれもった才能に依拠するものではなく、学びにより伸ばすことができるものであるという認識は残念ながらあまり浸透していない。高等教育機関におけるパブリックスピーキング教育は、断片的な知識や単なるスキルの習得に終始することなく、体系的に実施する必要があるだろう。そのために、指導者側は「話すこと」と同様に「聞くこと」を強化する視点をもち、パブリック

スピーキングが公的言論空間でのコミュニケーションであることを前提に、学生たちの目を社会問題へと向けさせるために工夫することが求められる。その先に一生の財産となる「話す力」の獲得と社会で活躍するためのコミュニケーション能力の向上が期待できるのではないだろうか。

## 〔注〕

- 1 2021年度は「ビジネストーク演習」(1年生対象 前期必修)、「プレゼンテーション入門」(1・2年生対象 後期選択)「ヴォイストレーニング」(1・2年生対象 後期選択)を担当した。
- 2 2021年度前期開講。1クラス19人から20人の編成であった。
- 3 ルーカスはパブリックスピーキングを“Public speaking, as its name implies, is a way of making your ideas public, of sharing them with other people and of influencing other people.”と定義している。
- 4 小西は、現在のメディア化された社会における公共空間での多種多様な語りをパブリックスピーキングとみなす必要があるのではないかと疑問を呈する。例えば、ポエトリーリーディングや抗議デモでの発言・座り込み・スローガン、ツイッターでの短文投稿やインスタグラムの写真等、他者に影響を与えるさまざまな語りを挙げる(小西 2017: 126-130)。しかしながら、本稿におけるパブリックスピーキングは一般的な定義に基づき、口頭コミュニケーションに限るものとする。
- 5 中学校で使用する教科書は、『新しい国語』(東京書籍)、『中学校国語』(学校図書)、『中学生の国語』(三省堂)、『中学国語 伝え合う言葉』(教育出版)、『国語』(光村図書)で、単元の内容は米田・山田が提示した表による(米田・山田 2015: 14)。
- 6 原田は、国語科の教師は話すことに関する教育を大学のカリキュラムの中でほとんど受けていないことを指摘する。話すことの項目が学習指導要領に明示されていることを踏まえるならば、教育現場で教師が自信をもって音声言語の指導を行える環境や制度を整えることが必要だとしている(原田 2016: 393)。
- 7 ウォルビンとコークスが提示した聞き方のタイプは、「職別的聞き方／Discriminative listening」「理解的聞き方／Comprehensive listening」「セラピー的聞き方／Therapeutic listening」「批判的聞き方／Critical listening」「鑑賞的聞き方／Appreciative listening」の5つである。
- 8 動機づけに関する研究者のドルニエイによれば、成績を除けば学習者の学習行動にもっとも顕著な変化をもたらすのは、教員が授業中あるいは書面で彼らに与えるフィードバックである。効果的なフィードバックの特徴は3つある。1つ目はフィードバックは適切な時期に行えば、満足感を与える機会を持ちうること、2つ目は励ますことで学習者の肯定的な自己概念と自信を高めること、3つ目は学習者に改善を要する箇所を建設的に熟考させることにより、学習効率を高めるために自分ができることを確認させることである(ドルニエイ 2005: 147-148)。このような点を念頭にフィードバックコメントを与えた。

## 〔参考文献〕

- ドルニエイ、ゾルダン／米山朝二、関昭典訳(2005)『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館書店  
深澤のぞみ(2017)「日本語教育におけるパブリックスピーキングー21世紀に必要な学びの1つとしてー」『金沢大学留学生センター紀要』第20号  
深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子(2011)「日本語教科書における口頭発表指導についてー日本語パブリックスピーキングの教授法確立を目指した基礎研究ー」『金沢大学留学生センター紀要』第14号  
深澤のぞみ・ヒルマン小林恭子(2012)「日本語パブリックスピーキング能力養成のニーズを探るための基礎調査」『金沢大学留学生センター紀要』第15号  
原良枝(2016)『声の文化史ー音声読書としての朗読ー』成文堂  
伊藤進(2008)『「聞く力」を鍛える』講談社  
鹿島千穂(2015)「英語ディベートクラスにおける動機づけとTEDトークの有効利用ープレゼンテーション能力の向上を目指してー」『東海大学高等教育研究』第13号  
小西卓三(2017)「パブリック・スピーキングとメディア社会」『メディア文化論ー想像力の現在』ナカニシヤ出版  
河野義章(2014)「パブリックスピーキング・スキルの研究ー対話をイメージさせる要因ー」『昭和女子大学心理学科紀要』第16号  
Lucas, Stephen. E. (2015) *The art of public speaking* (13th edition). New York: McGraw-Hill Education.  
齋藤純一(2000)『公共性』岩波書店  
高橋敬一郎(2003)『社会人として必要な「聞く力・話す力」の高め方』こう書房  
米田猛・山田範子(2015)「『聞くこと』に着目したパブリック・スピーキングの研究ーアメリカ合衆国教科書との比較を通しての考察ー」『富山大学人間発達科学実践総合センター紀要 教育実践研究』第10号  
小学校学習指導要領(国語)平成20年3月告示 国立教育政策研究所教育研究情報データベース

<https://erid.nier.go.jp/files/COFS/h19e/chap2-1.htm> (2021 年 11 月 1 日閲覧)

中学校学習指導要領(国語)平成 29 年 3 月告示 国立教育政策研究所教育研究情報データベース

<https://erid.nier.go.jp/files/COFS/h29j/chap2-1.htm> (2021 年 11 月 1 日閲覧)